

NetBackup™ Self Service インストールガイド

10.4

マニュアルバージョン 1

NetBackup™ Self Service インストールガイド

最終更新日: 2024-03-28

法的通知と登録商標

Copyright © 2024 Veritas Technologies LLC. All rights reserved.

Veritas、Veritas ロゴ、Veritas Alta、NetBackup は、Veritas Technologies LLC または関連会社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。その他の会社名、製品名は各社の登録商標または商標です。

この製品には、Veritas 社がサードパーティへの帰属を示す必要があるサードパーティ製ソフトウェア（「サードパーティ製プログラム」）が含まれる場合があります。サードパーティプログラムの一部は、オープンソースまたはフリーソフトウェアライセンスで提供されます。本ソフトウェアに含まれる本使用許諾契約は、オープンソースまたはフリーソフトウェアライセンスでお客様が有する権利または義務を変更しないものとします。このVeritas製品に付属するサードパーティの法的通知文書は次の場所から入手できます。

<https://www.veritas.com/about/legal/license-agreements>

本書に記載されている製品は、その使用、コピー、頒布、逆コンパイルおよびリバースエンジニアリングを制限するライセンスに基づいて頒布されます。Veritas Technologies LLC からの書面による許可なく本書を複製することはできません。

本書は、現状のままで提供されるものであり、その商品性、特定目的への適合性、または不侵害の暗黙的な保証を含む、明示的あるいは暗黙的な条件、表明、および保証はすべて免責されるものとします。ただし、これらの免責が法的に無効であるとされる場合を除きます。Veritas Technologies LLC およびその関連会社は、本書の提供、パフォーマンスまたは使用に関連する付随的または間接的損害に対して、一切責任を負わないものとします。本書に記載の情報は、予告なく変更される場合があります。

ライセンスソフトウェアおよび文書は、FAR 12.212 に定義される商用コンピュータソフトウェアと見なされ、Veritasがオンプレミスまたはホスト型サービスとして提供するかを問わず、必要に応じて FAR 52.227-19「商用コンピュータソフトウェア - 制限される権利 (Commercial Computer Software - Restricted Rights)」、DFARS 227.7202「商用コンピュータソフトウェアおよび商用コンピュータソフトウェア文書 (Commercial Computer Software and Commercial Computer Software Documentation)」、およびそれらの後継の規制に定める制限される権利の対象となります。米国政府によるライセンス対象ソフトウェアおよび資料の使用、修正、複製のリリース、実演、表示または開示は、本使用許諾契約の条項に従ってのみ行われるものとします。

Veritas Technologies LLC
2625 Augustine Drive
Santa Clara, CA 95054

<http://www.veritas.com>

テクニカルサポート

テクニカルサポートはグローバルにサポートセンターを管理しています。すべてのサポートサービスは、サポート契約と現在のエンタープライズテクニカルサポートポリシーに応じて提供されます。サ

ポート内容およびテクニカルサポートの利用方法に関する情報については、次の **Web** サイトにアクセスしてください。

<https://www.veritas.com/support>

次の URL で **Veritas Account** の情報を管理できます。

<https://my.veritas.com>

現在のサポート契約についてご不明な点がある場合は、次に示すお住まいの地域のサポート契約管理チームに電子メールでお問い合わせください。

世界共通 (日本を除く)

CustomerCare@veritas.com

日本

CustomerCare_Japan@veritas.com

マニュアル

マニュアルの最新バージョンがあることを確認してください。各マニュアルには、2 ページ目に最終更新日が記載されています。最新のマニュアルは、**Veritas** の **Web** サイトで入手できます。

<https://sort.veritas.com/documents>

マニュアルに対するご意見

お客様のご意見は弊社の財産です。改善点のご指摘やマニュアルの誤謬脱漏などの報告をお願いします。その際には、マニュアルのタイトル、バージョン、章タイトル、セクションタイトルも合わせてご報告ください。ご意見は次のアドレスに送信してください。

NB.docs@veritas.com

次の **Veritas** コミュニティサイトでマニュアルの情報を参照したり、質問したりすることもできます。

<http://www.veritas.com/community/>

Veritas Services and Operations Readiness Tools (SORT)

Veritas SORT (Service and Operations Readiness Tools) は、特定の時間がかかる管理タスクを自動化および簡素化するための情報とツールを提供する **Web** サイトです。製品によって異なりますが、**SORT** はインストールとアップグレードの準備、データセンターにおけるリスクの識別、および運用効率の向上を支援します。**SORT** がお客様の製品に提供できるサービスとツールについては、次のデータシートを参照してください。

https://sort.veritas.com/data/support/SORT_Data_Sheet.pdf

目次

第 1 章	概要	6
	Self Service のコンポーネントについて	6
第 2 章	前提条件	8
	前提条件について	8
第 3 章	インストール	10
	インストールの概要	10
	グラフィカルユーザーインターフェースによるインストール	11
	サイレントインストール	12
	検証	12
	インストールされるコンポーネント	12
第 4 章	アップグレード	14
	現在の環境の構成の確認	14
	アップグレードの準備	15
	グラフィカルユーザーインターフェース (GUI) によるアップグレード	16
	サイレントアップグレード	16
	検証	17
	アップグレード後の再同期	17
	アップグレード後の手順	18
	ロールバック	18
第 5 章	インストール後の検証	20
	インストール後の検証について	20
	目視での確認	20
	IIS 構成のチェック	21
	Windows サービス	21
第 6 章	アンインストール	22
	NetBackup Self Service のアンインストール	22

付録 A	ソフトウェア要件	23
	Self Service 向けの NetBackup ソフトウェア要件	23
付録 B	トラブルシューティング	25
	PowerShell 実行ポリシーについて	25
	失ったアプリケーションキーのリカバリ	27
付録 C	デフォルトの HTTPS 構成	29
	デフォルトの HTTPS 構成について	29
付録 D	負荷分散インストール	30
	負荷分散インストールについて	30
付録 E	イメージのアップロードのカスタマイズ	32
	イメージのアップロードのカスタマイズについて	32
付録 F	データベースをアップグレードするための低いデータベースアクセス権	33
	データベースをアップグレードするための低いデータベースアクセス権	33

概要

この章では以下の項目について説明しています。

- [Self Service](#) のコンポーネントについて

Self Service のコンポーネントについて

インストーラは `setup.exe` ファイルで構成されています。

インストール処理では以下のコンポーネントがインストールされます。

- パネル
- タスク
- データベース

このガイドの主な内容は、サーバー 2 台へのインストールです。Web サイトと Windows サービスをホストする Web サーバーと、データベースをホストするデータベースサーバーです。

追加のアドオンの 1 つを使用して、NetBackup Self Service ソリューションを拡張できます。VOX (Veritas Open Exchange) で、詳細情報やダウンロードの詳細を確認できます。次のリンクから特定の投稿にアクセスできます。

- iOS と Android の両方で利用可能なモバイル用 Veritas NetBackup Self Service アプリ
<https://tinyurl.com/y7g56u2r>
- Microsoft Teams 用 Veritas NetBackup Self Service ボット
<https://tinyurl.com/ycqkhfzh>
- Slack 用 Veritas NetBackup Self Service アプリ
<https://tinyurl.com/yc5snw7z>
- ServiceNow 用 Veritas NetBackup Self Service アプリ
<https://tinyurl.com/yadg2obh>

- VMware vRealize Automation 用 Veritas NetBackup Self Service プラグイン
<https://tinyurl.com/ybldbpcx>
- VMware vCloud Director 用 Veritas NetBackup Self Service プラグイン
<https://tinyurl.com/y77f68jv>

前提条件

この章では以下の項目について説明しています。

- [前提条件について](#)

前提条件について

NetBackup Self Service をインストールするユーザーには、SQL Server、Windows サービス、IIS (インターネットインフォメーションサービス) についての知識が必要です。

次の Windows プラットフォームに NetBackup Self Service をインストールできます。

- Windows Server 2012 R2
- Windows Server 2016
- Windows Server 2019
- Windows Server 2022

メモ: オペレーティングシステムに最新の Service Pack を適用します。

各コンポーネントの前提条件は次のとおりです。

表 2-1

コンポーネント	要件
データベース	<ul style="list-style-type: none">■ Microsoft SQL Server 2014、2016、2017、2019、または 2022 (SQL 認証方法を許可)■ Amazon RDS 上の Azure SQL Database または Microsoft SQL Server■ データ用に 5 GB 以上、ログ用に 2 GB 以上の空きディスク容量

コンポーネント	要件
Web サイトと Windows サービス	<ul style="list-style-type: none">■ Microsoft .NET Framework バージョン 4.7.2■ 標準の Windows インストールに含まれる Windows PowerShell 3.0■ SMTP サーバーへのアクセス■ 1 GB 以上の空きディスク容量■ .NET Desktop Runtime 6.0.21■ IIS ランタイムサポート (ASP.NET Core Module v2)■ IIS (Internet Information Services)■ Microsoft ODBC Driver 17 for SQL Server■ Microsoft Command Line Utilities 15 for SQL Server <p>メモ: インターネットが利用可能な場合は、Microsoft .NET Framework、.NET Desktop Runtime、IIS ランタイムサポート、IIS、ODBC Driver、Command Line Utilities といった、インストーラに表示される前提条件をインストールできます。インターネットが利用できない場合は、すべての前提条件をダウンロードし、インターネット接続のないコンピュータにコピーした後にインストールできる 2 つのバッチファイルを利用できます。バッチファイルは、Download Prerequisites.bat と Install Prerequisites.bat です。セットアップパッケージの Silent Files フォルダにあります。</p>

インストール

この章では以下の項目について説明しています。

- [インストールの概要](#)
- [グラフィカルユーザーインターフェースによるインストール](#)
- [サイレントインストール](#)
- [検証](#)
- [インストールされるコンポーネント](#)

インストールの概要

Self Service のインストールには複数の段階があります。.msi ファイルまたはサイレントインストール方式のいずれかを使用して、Self Service をインストールできます。表 3-1 に、処理の概要を示します。また、この章ではさまざまな Self Service コンポーネントがインストールされる場所について詳しく説明します。

表 3-1 インストールの概要

手順	追加情報
HTTPS	p.29 の「 デフォルトの HTTPS 構成について 」を参照してください。
グラフィカルユーザーインターフェース (GUI) によるインストール	p.11 の「 グラフィカルユーザーインターフェースによるインストール 」を参照してください。
サイレントインストール	p.12 の「 サイレントインストール 」を参照してください。
検証	p.12 の「 検証 」を参照してください。

グラフィカルユーザーインターフェースによるインストール

このセクションでは、NetBackup Self Service のインストールについて説明します。

NetBackup Self Service をインストールするには

- 1 `install_path\setup.exe` を実行して、InstallShield ウィザードを起動します。インストーラが実行され、インストールファイルがディスクにコピーされます。完了すると、コンフィギュレータが起動されます。
- 2 コンフィギュレータは、ローカル環境の NetBackup Self Service のインストール状態を確認します。
- 3 NetBackup Self Service のインストールが見つからない場合は、デフォルト値を変更できる構成ページが表示されます。[インストールの開始 (Start Installation)]を選択して、インストール処理を開始します。

- 4 [ポータル名 (Portal Name)]フィールドではサイトの名前を定義します。インストーラが作成する IIS アプリケーションと Windows サービスの名前を作成するために Self Service によって使用されます。インストーラの実行後は、ポータル名を変更できません。[ポータル名 (Portal Name)]は慎重に選んでください。

[作成するデータベース (Database to be created)]ダイアログで、作成するデータベースに関する情報を入力します。デフォルトのデータベース名は[ポータル名 (Portal Name)]と同じです。Veritas では、デフォルトのデータベース名を保持することをお勧めします。

[システムの基本通貨 (System Base Currency)]では、Self Service で使用する通貨の種類を定義します。

[システムの基本言語 (System Base Language)]では、ユーザーインターフェースに表示される言語を定義します。

- 5 コンフィギュレータの最後のページに、Web サイトの URL が表示されます。最初のログオン用のクレデンシャルは次のとおりです。

- ユーザー ID: Admin。
ユーザー名では大文字と小文字は区別されません。
- パスワード: password。
パスワードでは大文字と小文字が区別されます。

最初のログオン時にパスワードを変更する必要があります。この画面にある URL のコピーを保持してください。この URL を使用してシステムに接続します。

サイレントインストール

NetBackup Self Service をインストールしようとする前に、現在のコンピュータが NetBackup Self Service のすべてのインストール要件を満たしていることを確認します。これらの要件には、NetBackup Self Service の古いバージョンがインストールされていないことの確認が含まれます。

NetBackup Self Service をサイレントインストールするには:

- 1 構成ファイル `Install.ini` を編集します。DatabaseServer、UserNameForSA、PasswordForSA の各設定を必ず更新します。

Windows 認証を使用して SQL Server にログオンする場合は、`UseWindowsAuthentication=1` を設定し、`PasswordForSA` の値は空のままにすることができます。

- 2 `install_directory¥SilentInstall.bat` を右クリックし、「管理者として実行」を選択します。インストールが開始され、コマンドラインウィンドウにインストールの進捗状況が表示されます。インストールが完了すると、コマンドラインウィンドウが閉じます。

コマンドラインからサイレントインストールを直接起動することもできます。コマンドプロンプトを開き、`SilentInstall.bat` ファイルを含むディレクトリに変更してから、`SilentInstall.bat` を実行します。

インストールログファイル `timestamp_install.log` が、`SilentInstall.bat` ファイルと同じディレクトリに生成されます。このファイルでインストールの結果を確認します。インストールが成功した場合は、テスト目的で

`https://domainname/NetBackupSelfService` にアクセスできます。インストールが失敗した場合は、インストールログにトラブルシューティング情報が記載されています。

検証

インストールが完了したら、ポータルでのインストールの最終画面にある URL とクレデンシャルを使用して Web サイトにログインします。インストールを検証して初期セットアップを実行する方法に関する詳細情報を参照できます。

p.20 の「インストール後の検証について」を参照してください。

インストールされるコンポーネント

このセクションでは、NetBackup Self Service のデフォルトインストールの結果を示します。インストールされているコンポーネントと、コンポーネントがインストールされている場所を確認できます。

ファイルシステム

ポータルとアダプタは C:\Program Files\Veritas\NetBackup Self Service *version_number* にインストールされます。

IIS

この構成では、Web ページをホストする IIS パブリック Web サイトが作成されます。

Windows サービス

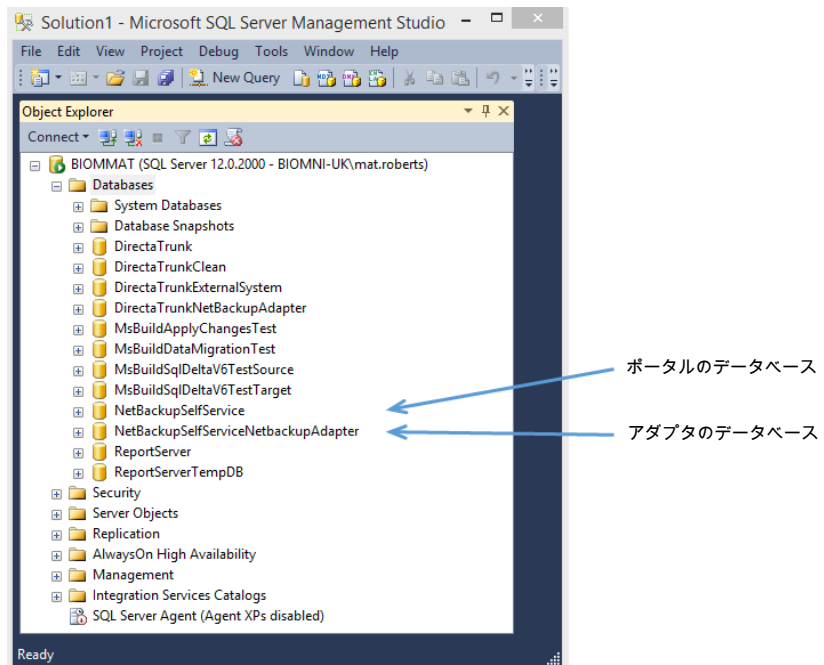
ポータルは Windows サービスをインストールします。

データベース

2 つのデータベースが作成されます。

- ポータルのデータベース: NetBackup Self Service
- アダプタのデータベース: NetBackupSelfServiceNetBackupAdapter

図 3-1 Self Service データベース



アップグレード

この章では以下の項目について説明しています。

- [現在の環境の構成の確認](#)
- [アップグレードの準備](#)
- [グラフィカルユーザーインターフェース \(GUI\) によるアップグレード](#)
- [サイレントアップグレード](#)
- [検証](#)
- [アップグレード後の再同期](#)
- [アップグレード後の手順](#)
- [ロールバック](#)

現在の環境の構成の確認

アップグレードを開始する前に、既存のインストールを確認します。Self Service には、通常 2 台のサーバーに分散される 6 つのコンポーネントがあります。

表 4-1 一般的な Self Service の構成

場所	コンポーネント
IIS サーバー	<ul style="list-style-type: none">■ NetBackupSelfService■ NetBackupSelfServicePublicWebService
Windows サービス	<ul style="list-style-type: none">■ ポータル Windows サービス■ アダプタタスク (Self Service 9.1 以降)

場所	コンポーネント
SQL Server	<ul style="list-style-type: none">■ ポータルデータベース■ アダプタデータベース

NetBackup Self Service から環境内のコンポーネントを特定できます。

- IIS コンポーネントを特定します。
Web サーバーにログオンし、IIS (インターネットインフォメーションサービス) マネージャを開きます。
サイトを参照し、表 4-1 に一覧表示されている 2 つの IIS コンポーネントを特定します。
- Windows サービスを特定します。
Windows サービスでサーバーにログオンします。Self Service のデフォルトインストールでは、このサービスは Web サーバーにあります。
[サービス (Services)] を開き、[ポータル Windows サービス (Portal Windows Service)] を見つけます。
- データベースを特定します。
Microsoft SQL Server Management Studio を開き、データベースサーバーに接続します。
表 4-1 に一覧表示されている 2 つのデータベースを特定します。
p.12 の「インストールされるコンポーネント」を参照してください。

アップグレードの準備

アップグレードの準備にはいくつかの手順を実行する必要があります。

アップグレードを準備するには

- 1 データベースのバックアップを作成します。
アップグレードを開始する前に、両方の Self Service データベースをバックアップする必要があります。データベースのデフォルト名は NetBackupSelfService と NetBackupSelfServiceNetBackupAdapter です。SQL Server Management Studio で次の手順を実行します。
 - NetBackupSelfService データベースの復旧モデルをメモします。
 - データベースの復旧モデルを[単純]に設定します。
 - データベースのバックアップを作成します。
 - NetBackupSelfServiceNetBackupAdapter データベースの復旧モデルをメモします。
 - データベースの復旧モデルを[単純 (Simple)]に設定します。

- データベースのバックアップを作成します。
- 2 ポータルをオフラインにします。

Veritas は、アップグレードの実行中はユーザーのログオンとアクティビティを防ぐことをお勧めします。ユーザーのログオンとアクティビティを防ぐ最も良い方法は、IIS (インターネットインフォメーションサービス) マネージャを使用してポータル Web サイトのアプリケーションプールを停止することです。

アプリケーションプールの停止中にユーザーが Web サイトに接続しようすると、Web ブラウザに「HTTP Error 503. The service is unavailable」エラーが表示されます。

アップグレード中に他のアプリケーションプールは停止しないでください。接尾辞 `PublicWebServiceAppPool` を含むアプリケーションプールを停止すると、アップグレードは失敗します。パブリック Web サービスはアップグレードに使用されます。

グラフィカルユーザーインターフェース (GUI) によるアップグレード

NetBackup Self Service をアップグレードするには

- 1 インストーラ `install_directory¥setup.exe` を実行します。
インストーラが実行され、インストールがコンピュータにコピーされます。インストールが完了すると、コンフィギュレータが起動されます。
- 2 元の構成パラメータが自動的に入力されます。アップグレードを開始するには、[アップグレードの開始 (Start Upgrade)] を選択します。
- 3 アップグレードが正常に完了したら、現在、マシンが最新バージョンの **Microsoft .NET Runtime 6.0** と **Microsoft Windows Desktop Runtime 6.0** を使用していることを確認します。それらのアプリケーションの以前のバージョンを使用している場合は、**Microsoft** 社のダウンロードサイトに移動して各アプリケーションの最新バージョンを入手し、インストールします。

サイレントアップグレード

NetBackup Self Service をアップグレードしようとする前に、**NetBackup Self Service** が現在のコンピュータにインストールされていることを確認します。

NetBackup Self Service をサイレントアップグレードするには:

- 1 **NetBackup Self Service** データベースのバックアップコピーを作成します。デフォルトで、コピーの名前は `NetBackupSelfService` と `NetBackupSelfServiceNetBackupAdapter` になります。コマンドラインまたは **SQL Management Server** からバックアップを作成します。
- 2 サイレントアップグレードでは、既存の **NetBackup Self Service** インストールから必要なすべての情報を収集できます。アップグレードを起動する前に何も構成する必要はありません。

`install_directory\Silent Upgrade.bat` を右クリックし、[管理者として実行] を選択します。アップグレードが開始され、コマンドラインウィンドウにアップグレードの進捗状況が表示されます。アップグレードが完了すると、コマンドラインウィンドウが閉じます。

コマンドラインからサイレントアップグレードを直接起動することもできます。コマンドプロンプトを開き、`SilentUpgrade.bat` ファイルを含むディレクトリに変更してから、`SilentUpgrade.bat` を実行します。

アップグレードログファイル `timestamp_upgrade.log` が、`SilentUpgrade.bat` ファイルと同じディレクトリに生成されます。このファイルでアップグレードの結果を確認します。ファイルの末尾に `Upgrade succeeded` と表示されている場合、アップグレードは成功です。`Upgrade failed` と表示されている場合、アップグレードは失敗です。アップグレードが失敗した場合は、アップグレードログにトラブルシューティング情報が記載されています。

検証

アップグレードを検証するには:

- 1 ポータルアプリケーションプールを開始して、**Web** サイトをオンラインにします。
- 2 ポータルにログインします。
- 3 検証手順を実行して正しくインストールされていることを確認します。

p.20 の「[インストール後の検証について](#)」を参照してください。

アップグレード後の再同期

アップグレード後に、クラウドを使用している場合は **NetBackup** と **vCloud Director** 間でデータを手動で再同期します。1 日に 1 回、システム同期と資産のインポートの 2 つのスケジュール設定されたタスクが実行されます。システム同期は、すべてのバックアップサーバーから新しいバックアップイメージをインポートし、古いバックアップイメージを期限切れにして使用量を計算します。これらのタスクが実行されるまで、ユーザーに表示されるデータは不完全な可能性があります。

データを再同期するには

- 1 管理者として Web サイトにログインし、[監視 (Monitoring)] タブに移動します。画面の左側にスケジュール設定されたタスクが表示されます。
- 2 [システム同期 (System Sync)] タスクの横にある歯車をクリックし、[今すぐ実行 (Run Now)] を選択します。
- 3 (条件付き) vCloud Director を使用する場合は、[資産のインポート (Asset Import)] タスクの横にある歯車をクリックし、[今すぐ実行 (Run Now)] を選択します。
- 4 画面の右側の [アクティビティ (Activity)] セクションで、これらのタスクの進捗状況を監視します。

これらの手順を手動で実行しない場合、タスクは自動的に夜間に実行されます。

アップグレード後の手順

アップグレードが完了したら、すべてのプライマリサーバーの接続性チェックを完了します。

Veritas では、すべてのデータの再同期化もお勧めします。

アップグレードの一環として、2つのデータベースがバックアップされ、復旧モデルが [単純 (Simple)] に設定されています。データベースの復旧モデルを初期値に戻します。

データベースを初期値に戻すには:

- 1 両方のデータベースを圧縮します。
- 2 データベースの復旧モデルを元の値に戻します。

アップグレードを実行すると、新しい一連のコードがサーバー上の新しい場所に配置されます。アップグレードが完了したら、古いインストールを削除します。

古いインストールコードを削除するには

- 1 [プログラムの追加と削除] に移動します。
- 2 次のコンポーネントの以前のバージョンをすべてアンインストールします。
 - NetBackup Self Service ポータル
 - NetBackup Self Service アダプタ

ロールバック

以前のバージョンに戻すには、2つの NetBackup Self Service データベースのリストアが必要です。さらに、以前のポータルとアダプタを再インストールするか、バックアップから Web サーバーをリストアする必要があります。

ポータルとアダプタを再インストールする場合は、インストール時に[コンポーネントの選択 (Select Components)]ダイアログボックスで[データベース (Database)]が選択されていないことを確認します。どちらの場合も、データベースはリストアされ、再インストールする必要はありません。

ポータルの再インストール中にアプリケーションキーの入力を求めるメッセージが表示されたら、以前のインストールのアプリケーションキーを入力します。このアプリケーションキーは、リストアされたデータベースでサードパーティのパスワードの暗号化に使用されるキーで、以前のバージョンを配備した際に記録されています。

インストール後の検証

この章では以下の項目について説明しています。

- [インストール後の検証について](#)
- [目視での確認](#)
- [IIS 構成のチェック](#)
- [Windows サービス](#)

インストール後の検証について

インストールが完了すると、一連の確認を行ってインストールを検証できます。

表 5-1 NetBackup Self Service 検証チェックリスト

検証	追加情報
Web サイトのメイン画面を目視で確認します。	p.20 の「 目視での確認 」を参照してください。
Windows サービスが正しく構成されていることを確認します。	p.21 の「 Windows サービス 」を参照してください。

目視での確認

インストール後は、システムが正しくインストールされているかを確認することが重要です。ポータル Web サイトにログインします。Web サイトのメイン画面が正しく表示されることを確認します。

IIS 構成のチェック

インストール後、IIS が正しく構成されていることをチェックします。[スタート]メニューで[インターネット インフォメーション サービス]を検索します。

- [インターネット インフォメーション サービス]、[サイト]、[既定の Web サイト]、[バインド]の順に選択して、インストーラが **SSL 証明書** を作成したことを確認します。
- [インターネット インフォメーション サービス]、[サイト]、[既定の Web サイト]、[バインド]の順に選択して、ポート **443** へのバインドが作成され、証明書が割り当てられていることを確認します。

Windows サービス

インストール後は、Windows サービスが正しく動作していることを確認してください。Windows サービスがインストールされているサーバーで以下を行います。

- イベントビューアを開き、アプリケーションログに移動します。
- **DirectaService10.3\$NetBackupSelfService** のソースを含むメッセージを検索します。名前はわずかに異なる場合があります。命名規則は **DirectaService10.3\$SiteName** で、**SiteName** は Web サイトの名前です。
- Windows サービスがエラーをログに記録した場合は、構成に問題がある可能性があります。エラーの詳細を調べます。

一般的な構成の問題は、Windows サービスがデータベースに接続できないことです。Windows サービスは、データベースへの接続が構成ファイルで定義されているかを確認します。サービスがデータベースに接続できない場合、Windows イベントログにエラーが記録されます。

アンインストール

この章では以下の項目について説明しています。

- [NetBackup Self Service](#) のアンインストール

NetBackup Self Service のアンインストール

アンインストール処理では、インストール場所に接続されている Windows サービスが削除されます。その後、ハードディスク上のソフトウェアが削除されます。

アンインストールしても、作成された 2 つのデータベースは削除されません。データベースは手動で削除する必要があります。

NetBackup Self Service をアンインストールするには

- 1 アンインストールする **NetBackup Self Service** のバージョンを決定します。
- 2 [Veritas Front Office Service 10.3 (NetBackupSelfService)] サービスを見つけて停止します。
- 3 Windows で [プログラムと機能] を開きます。
- 4 [NetBackup Self Service バージョン] を検索し、[アンインストール] を選択します。

アンインストール処理が完了したら、SQL Server Management Studio 内からデータベースを削除します。[オブジェクトエクスプローラー] で [データベース] ノードを展開します。関連する各データベースを右クリックし、[削除] を選択します。

ソフトウェア要件

この付録では以下の項目について説明しています。

- [Self Service](#) 向けの [NetBackup](#) ソフトウェア要件

Self Service 向けの NetBackup ソフトウェア要件

最新の [Service Pack](#) を含む [NetBackup 8.0](#) 以降が必要です。Windows プライマリサーバーでは、英語 (米国) のオペレーティングシステムと [NetBackup](#) のコードページインストールのみがサポートされます。[NetBackup](#) 言語パックはサポートされません。

UNIX プライマリサーバーでは、プライマリサーバーのオペレーティングシステムの文字エンコードは UTF-8 にする必要があります。複数のロケールがサポートされます。[NetBackup](#) 言語パックもサポートされます。

[NetBackup Appliance](#) もサポートされます。

Self Service のソフトウェア要件

[Self Service](#) のソフトウェア要件は次のとおりです。

- [vCloud Director](#) 統合構成を使用する場合は、ソフトウェア互換性リストでサポートされている API バージョンを確認します。
<http://www.netbackup.com/compatibility>
- サポート対象のオペレーティングシステムのいずれかがインストールされていれば、[NetBackup Self Service](#) は [Hyper-V](#) や [vSphere](#) などの任意の仮想プラットフォームで動作します。

次に示すリストで、サポート対象のオペレーティングシステム、[SQL Server](#)、[Web ブラウザ](#)を定義します。最新の [Service Pack](#) を常に使用する必要があります。

メモ: サポート対象として表示されていないオペレーティングシステム、[SQL Server](#)、[Web ブラウザ](#)のバージョンはサポート対象外と見なされます。

サポート対象のオペレーティングシステム:

- Windows Server 2012 R2
- Windows Server 2016
- Windows Server 2019
- Windows Server 2022

サポート対象の SQL Server:

- SQL Server 2014
- SQL Server 2016
- SQL Server 2017
- SQL Server 2019
- SQL Server 2022
- Azure SQL Database
- Amazon RDS 上の SQL Server

サポート対象ブラウザ:

- Internet Explorer 11
- Edge
- Firefox
- Chrome
- Safari (サポート対象ですが、非推奨です)

トラブルシューティング

この付録では以下の項目について説明しています。

- [PowerShell 実行ポリシーについて](#)
- [失ったアプリケーションキーのリカバリ](#)

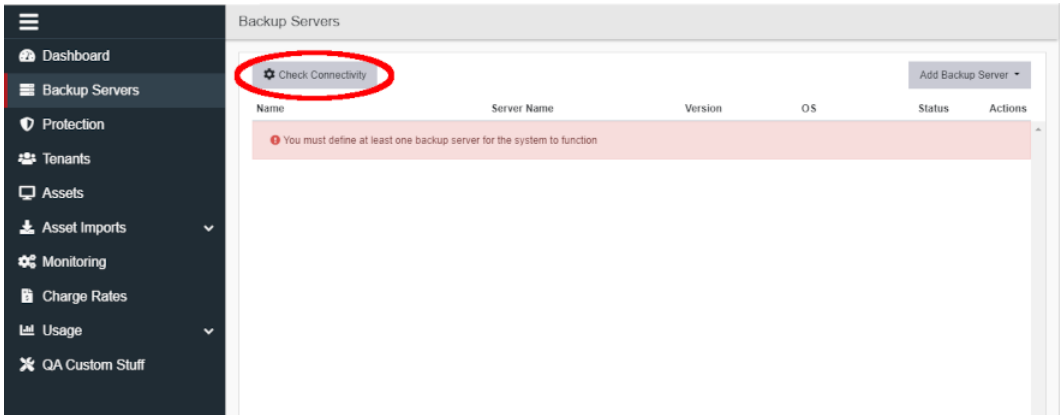
PowerShell 実行ポリシーについて

PowerShell 実行ポリシーにより、PowerShell がスクリプトを実行できるかどうかを決定します。インストーラが実行ポリシーを[RemoteSigned]に設定することで、スクリプトの実行が許可されます。インストーラでこの手順が失敗するか、インストール後に実行ポリシーが変更された場合、問題が発生します。この付録では、実行ポリシーの問題の診断と解決について説明します。

診断

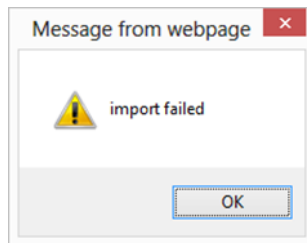
- Web サイトにログオンします。
- [バックアップサーバー (Backup Servers)]タブをクリックします。
- [接続の確認 (Check Connectivity)]アイコンをクリックします。

図 B-1 接続の確認



次のようなエラーメッセージが表示された場合は、実行ポリシーに問題がある可能性があります。[接続の確認 (Check Connectivity)]でエラーが生成されない場合、実行ポリシーは正しく設定されます。

図 B-2 インポートに失敗した場合のポップアップボックス



実行ポリシーの問題を確認するには、エラーログに移動します。%ProgramData%\Veritas\NetBackupSelfServiceの順に選択し、エラーを確認します。実行ポリシーの問題の例を次に示します。

```
"CreateRequest failed with error:  
File  
C:\Temp\NetBackupAdapter\NetBackupAdapterServices\PowerShellScripts\  
ValidationHook\Initial.ps1 cannot be loaded because running scripts  
is  
disabled on this system. For more information, see  
about_Execution_Policies  
at http://go.microsoft.com/fwlink/?LinkID=135170. File C:\Temp  
\NetBackupAdapter\NetBackupAdapterServices\PowerShellScripts\  
ValidationHook\Initial.ps1 cannot be loaded because running scripts is disabled on
```

```
this  
system. For more information, see about_Execution_Policies at  
http://go.microsoft.com/fwlink/?LinkID=135170."
```

解決方法

- 1 Web サーバーにログオンします。
- 2 管理者として PowerShell コマンドプロンプトを開きます。
- 3 `Get-ExecutionPolicy -List` と入力します。
現在の実行ポリシーのリストが表示されます。
- 4 `[LocalMachine]` のスコープが `[RemoteSigned]` に設定されていない場合は、次のコマンドを入力します。

```
Set-ExecutionPolicy -Scope LocalMachine -ExecutionPolicy  
RemoteSigned
```

実行ポリシーのスコープは、リストの上位にある項目の優先度を高く扱い、リストの下位にある項目を上書きします。スコープ `[MachinePolicy]` が `[Restricted]` に設定されている場合、`[LocalMachine]` が `[RemoteSigned]` に設定されていてもスクリプトは実行できません。次の [Stack Overflow](http://stackoverflow.com/a/27755459) の投稿で、このような問題を解決する方法が説明されています。

<http://stackoverflow.com/a/27755459>

失ったアプリケーションキーのリカバリ

アプリケーションキーは、システムの正しい操作にとって重要です。アプリケーションキーが失われた場合は、サードパーティのパスワードをリカバリできません。ログオンには影響しませんが、アダプタのパスワードと統合設定を再入力する必要があります。

アプリケーションキーを実際に失う方法は 2 つあります。

- Web サーバーで障害が発生した場合。
- Web サイトがアンインストールされた場合。

1 つ目の問題を緩和するには、Web サーバーのバックアップを保持する必要があります。

2 つ目の問題の例は、Web サーバーを別の物理コンピュータに移動する必要がある場合です。古いサーバーの構成ファイルからアプリケーションキーをコピーし、そのアプリケーションキーを使用して新しい Web サイトをインストールする必要があります。新しいサーバーが正しく動作することをテストし、サーバーの有効なバックアップがあることを確認します。インストールが完了したら、古いサーバーから Web サイトをアンインストールします。

アプリケーションキーとデータベース接続文字列は、コンポーネントの `appsettings.json` という名前の構成ファイルに格納されます。

デフォルトの HTTPS 構成

この付録では以下の項目について説明しています。

- [デフォルトの HTTPS 構成について](#)

デフォルトの HTTPS 構成について

インストールでは、デフォルトで HTTPS を使用するようにサイトが構成されます。インストールではデフォルトで自己署名証明書が追加され、HTTPS バインドが作成されます。

負荷分散インストール

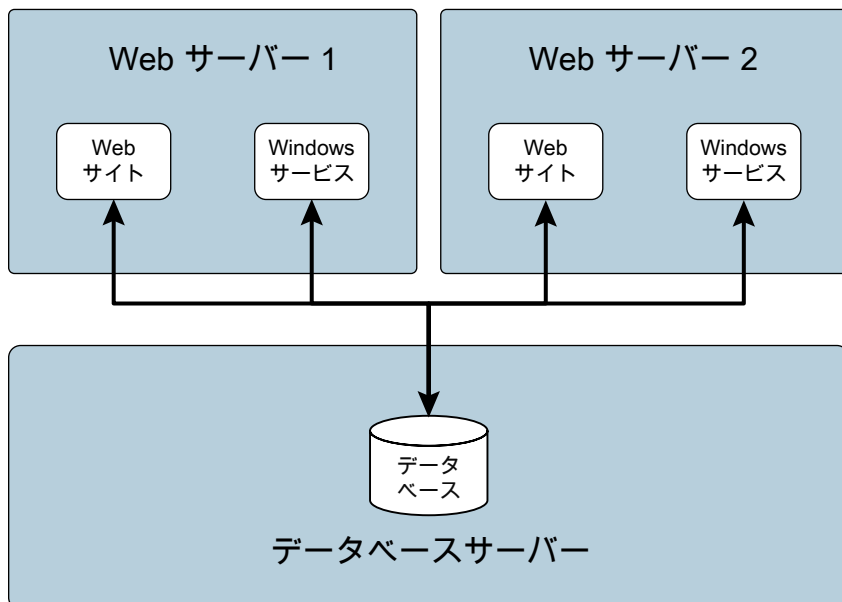
この付録では以下の項目について説明しています。

- [負荷分散インストールについて](#)

負荷分散インストールについて

負荷分散インストールではデータベースサーバーとデータベースは 1 つですが、Web サイトと Windows サービスの複数のインスタンスがあります。この構成により負荷分散と冗長性を実現します。

図 D-1 負荷分散インストールの例



インストールは、任意の **Web** サーバーまたはアプリケーションサーバーで実行できます。インストール処理では必要なすべてのファイルがサーバーにコピーされます。

負荷分散インストールを作成する場合、各 **Web** サーバーのすべての構成ファイルは一貫性を保つ必要があります。つまり、すべてのサーバーに同じアプリケーションキー、同じ接続文字列などが必要です。この一貫性を実現するには、負荷分散に関係なく、各 **Web** サーバーに **NetBackup Self Service** をインストールする必要があります。次に、最初のサーバーの構成をコピーし、**NetBackup Self Service** コマンドツールを使用して他のすべてのサーバーに貼り付けます。この構成に対して下記の手順を使用します。

負荷分散インストールの場合

- 1 各 **Web** サーバーで新規インストールを実行します。データベース名オプションには、元のサーバーと同じ名前を使用しますが、末尾に番号を追加します。
- 2 元のサーバーで、コマンドプロンプトウィンドウを開き、以下のコマンドを実行します。このコマンドにより、構成が文字列として出力されます。文字列をコピーし、他のすべてのサーバーに貼り付けます。

```
install_directory¥Veritas¥NetBackup Self Service 10.3¥Install  
Files¥nsscmd.exe -getconfig
```

- 3 他のサーバーで、コマンドプロンプトウィンドウを開き、以下のコマンドを実行します。

```
install_directory¥Veritas¥NetBackup Self Service 10.3¥Install  
Files¥nsscmd.exe -setconfig configuration string from the original  
web server
```

このコマンドにより、元の **Web** サーバーから新しいサーバーに構成が貼り付けられます。これで、新しい **Web** サーバーが元のサーバーと同じデータベースに接続されます。

- 4 インストールプロセスで新しい **Web** サーバーに作成された未使用のデータベースをすべて削除します。

p.27 の「[失ったアプリケーションキーのリカバリ](#)」を参照してください。

イメージのアップロードのカスタマイズ

この付録では以下の項目について説明しています。

- [イメージのアップロードのカスタマイズについて](#)

イメージのアップロードのカスタマイズについて

イメージのアップロードは自動的に構成されます。アップロードされたイメージは、デフォルトでは `C:\inetpub\Veritas\Images` に格納されます。負荷分散インストールでは、ユーザーがシステムにアップロードするイメージをすべての Web サーバーで共有する必要があります。アップロードされたイメージが共通のネットワークストレージ領域に存在するように構成する必要があります。このセクションでは、ストレージの場所を変更する方法について説明します。

ストレージの場所を変更するには

- 1 `install_location\Website\appsettings.json` に移動します。
- 2 `[PathForUploadedImages]` テキストボックスに、アップロードされたイメージが格納されているパスを入力します。パスは、ローカルサーバー上 (`C:\uploadedimages` など) または UNC 共有 (`\\myshare\uploadedimages` など) のいずれかのパスにできます。

イメージが正しくアップロードされることを検証するには

- 1 管理者として Web サイトにログオンします。
- 2 `[管理 (Admin)]`、`[設定 (Settings)]`、`[通知 (Notice)]` に移動し、`[新規 (New)]` アイコンを選択し、`[アップロード (Upload)]` アイコンを選択します。
- 3 イメージファイルを参照してアップロードします。イメージが正常にアップロードされると、`[イメージマネージャ (Image Manager)]` ダイアログボックスにイメージが表示されます。

データベースをアップグレードするための低いデータベースアクセス権

この付録では以下の項目について説明しています。

- データベースをアップグレードするための低いデータベースアクセス権

データベースをアップグレードするための低いデータベースアクセス権

データベースをアップグレードする際は、データベースのアップグレードを実行するためのデータベースログオンを選択する必要があります。最も簡単な選択は、「sysadmin」役割を持つユーザーの使用です。

データベース管理者 (DBA) から **sysadmin** 役割を付与されない場合は、低い権限セットでデータベースのアップグレードを実行できます。この付録では、低いアクセス権でのアップグレードプロセスについて説明します。

次の SQL スクリプトは、データベースのアップグレードに適したログオン **UpgradeUser** を作成します。

アップグレード用に低い権限を持つユーザーを作成するには

- 1 **SQL Management Studio** でこのスクリプトを実行して、データベースのアップグレードに適したログオンおよびユーザーを作成します。
- 2 コンフィギュレータを実行してアップグレードするデータベースを選択するとき、次のように選択します。
 - 認証モード: Sql

- DB ユーザー: UpgradeUser
- DB パスワード: *password*

3 UpgradeUser はアップグレードプロセス中にのみ使用するため、インストールが完了したら無効にするか削除できます。

```
-- Create a login for upgrading the database
use master
Create Login UpgradeUser WITH PASSWORD = 'password', Check_Policy =
    OFF
GO

-- Make a database user for the login
-- and give them db_owner role on the target database
USE NetBackupSelfService
CREATE USER UpgradeUser FOR LOGIN UpgradeUser
GO
ALTER ROLE db_owner ADD MEMBER UpgradeUser
GO

-- Allow ownership of database to be transferred to sa.
-- The sa login can be disabled as per good dba practice,
-- and everything will still work ok.
use master
GRANT IMPERSONATE ON LOGIN::sa to UpgradeUser
```